



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



野村慶太氏(岡山理科大学附属高等学校)

国際バカロレアコースの英語 B と TOK (知の理論) を担当。1 期生から担当していた生徒たちはディプロマも取得し、これから卒業を迎える。普通コースでは英語コミュニケーション 1 を教える。

「これまで見た事のない形での成長を遂げる I B 生。教員もまた多様性の中で学び合う新たな融合のカリキュラム」

I B 生としてインターナショナルスクールでディプロマを取得。
I B や社会での学びの価値観を還元したいという思い

I B に初めて触れたのは、13 年程前。中学は地元の一般校で、その後広島インターナショナルスクールに編入し、自分自身も I B 生として高校時代を過ごしました。編入した後、英語ができないという事実に向面しましたが、英語の先生のもとでブラッシュアップし、バイリンガルフルディプロマを取得しました。担当の先生には大変お世話になりました。

I B 生として学んでいた中で、教員と生徒の「関係性の違い」に驚きました。それは、今までの経験と全く異なります。インターナショナルスクールだったから、という事もあったのかもしれませんが、生徒それぞれの個性を重んじる風土があり、「なぜあなたはそう思うの」ととにかく「自分の思考」にフォーカスを当てていました。そのために必要な関りを、先生が検討し実行してくれました。先生は教えてくれる存在というよりは、自分自身の考えを深めたり、広げるための関りをしてくれる存在でした。教育の目的は何のために教育をするのかという根本がそもそも違うからこそ、先生に求められるものも関係性も、すべてが変わってくるのだと理解しています。生徒たちが自分たちの力で考えを深められるよう、声をかけてくれる先生たちでした。

高校時代は、ディプロマを取るだけで精一杯の毎日で進路は決めかねていたのですが、父が経営者という事もあり、父の事業を手伝うことを漠然と考えていました。しかし、父の「社会経験を積んでから決めては」という助言で、東京の飲食事業の会社と教育事業の会社で社会人経験も積み、最終的には、教育にたずさわりたいという思いに至りました。人格形成に大きな影響を与える初等部の教育に最も関心を持ち、教育を通じて、日本を変えていきたいとも思っ

ていました。そのために小学校の教師として I B や社会での学びの価値観を還元しようと思い、後に岡山大学の教育学部で小学校教員免許、中高の副免許を取りました。

日本の教育に I B 教育を取り入れたいと考えていた自分が
思いがけず I B の教員に

岡山大学に進学の際、当時は I B 入試がなく、書類選考と面接で入試を突破しました。大学 4 年生の時には、父のフィリピンの現地法人の仕事を手伝う経験や、マニラの日本人学校など、フィリピンの教育を目の当たりにする機会も得て、複数の国で様々な教育に触れる人生に恵まれました。多文化を尊重する事を学び、どうやって国際的な日本人として、どう世界の中で共存していくのか考えることが重要だと思いました。

そして卒業論文のために研究をしたり、実習を重ねる中で、日本の教育の中に、I B 教育を入れ込むのは難しいのではないかと、という諦めも感じ始めました。小学校の教員になったとしても、果たして私の経験できたことを子ども達に還元できるのだろうか悩みました。大学での学びや社会人としての経験を何かに生かせないかと考えていたところ、岡山理科大学附属高校のオープンスクールに、I B 修了生としてゲスト参加してくれないか、というご招待を受けました。また、そこで「本校の I B 教員として働かないか」とお声がけをいただいて、現職に至りますが、まさか自分が高校の教員になるとは思っていませんでした。現在では、複数の学年を担当していますが、1 期生から I B を担当した生徒たちについては、もう卒業をひかえるばかりです。I B コースの 1 期生たちは、良いスコアを取得したり、本コースで鍛えられた国際人としての力を発揮したりして、希望の大学に無事進学することになりました。

学校や生徒が I B 教育を求める理由と学校に生まれる 新たな学び

どういう目的で I B 教育を導入しているのかは国や学校によって違うと感じていますが、大きく分けて次の 3 つの理由が考えられます。

1. 世界標準の国際的な教育というブランドのため
2. 抜本的な教育改革を求めての導入
3. 海外進学に有利なツールとしての位置付け

日本の場合、国際競争力をあげるため、グローバル人材育成のために導入していると思われるのですが、学校単位ではどうなのか、D P に対して先生がどう取り組むかで大きく変わってきます。本校の場合は、伝統ある私立高校としての文化や 1 条校としての教育課程、教育観との共存を目指しています。その過程で生み出されるインパクトは、これまでにない新しいものを生み出すと考えています。そして、これからの日本で注目される力とは、I B 生が培うコミュニケーションスキルを始めとした高度な非認知能力と批判的な思考力、そして国際的な感覚であると考えています。

私は生徒にどうして I B を選んだのかいつも訪ねるのですが、今までにない教育を求め、「国際的な力を身に着けたい。世界で通用する力を。」と答える生徒が多いです。そのためなら苦勞できるという子、主体的で探究的な学びを楽しみと思える子は、I B に向いていると思います。概念学習、探究学習、というのは答えを教えてくれる教育ではありません。例えば化学や歴史といった授業でも、覚えるためだけの答えを提供してくれません。考えが行き詰まったら手助けはありますが、基本的には生徒たちは答えのない問題、答えのない議論に長い時間をかけて取り組みます。リサーチにも取り組み、「そのプロセスこそ求めていた学びだ」と納得できる子こそ I B 教育への適性はあると考えます。ただ、どの科目でも課題が多いので、自己・時間管理を主体的に行い、課題を計画的に実施できない場合は苦勞するかもしれません。また、英語 B の学習では、様々な国のことに触れるので、日本人としてのアイデンティティには肯定的な誇りをもって、国際的な日本人として、卒業後も活躍してほしいです。国際的なものの見方、考え方が必要となってくる未来において、日本の国の文化・伝統を理解し、他国の伝統や異文化を理解することで、真の国際人となれると期待しています。

I B を導入したことで、本校で変わった点は I B の教育課程と日本の学習指導要領などを通じて、教員同士の

学び合いの機会が増えた事です。その過程でお互いの立場や意見がぶつかり合うこともあります。そこから相互に新しい発見が生まれます。教員の中にも多様性があり、それによる全く新しい最適化された国際的な日本の学びのカリキュラムが本校にはあるのではないかと思います。

I B 教育に関心がある方々へのメッセージ

自分も常に心掛けていることですが、原点に立ち返る一教育そのものに立ち返って「何のために教育をするのか」ということを考えていただきたいです。I B の目的は世界平和に貢献できる人を育成することです。International mindedness (国際的なものの見方や考え方) を持って、I B 教員はファシリテーターとして生徒を導くことになるので、その力を身に着けるためには、他国の教育を研究することもよいと考えています。

今、世界中の U B スクールでは様々な言語で I B 教育が提供されています。本校のように 1 条校で I B 教育を学ぶとなると、生徒・教員共に言語の壁に直面します。日本語を母語とする生徒たちが I B 教育を日本語で学ぶことには有利な面もありますが、その一方で、国際バカロレアは多言語主義であり、英語を用いたコミュニケーション能力の向上も非常に重視しています。世界には、英語を使うからはじめて得られる情報も多いのです。つまり、日本の I B 校は日本語と英語の両側面から I B 教育を提供しなければなりませんが、学校には人的・物理的な限界があると理解しています。すべての学校の教員がバイリンガルではなく、入学してくる生徒の英語力にも大きな差があるという課題もあります。I B 校として、多言語主義の I B 教育をどうすれば最も適切に提供し、高い学習効果を生むことができるのかは常に頭を悩ませる難しい問題だと思います。

ただ、I B 教育の導入を検討する皆さまへお伝えしたいのは、間違いなく、これまで見たことのない形で成長する生徒の姿を目の当たりにできるということです。こんなに変わった、ここまで出来るのかという驚きが常にあります。保護者の方々からも「中学の頃と比較して、こんなに変わるとは思っていなかった」というお声をいただくこともございます。一期生の卒業をひかえて、これまで I B 教員として信じてきた「教育の意義」はまさにここにあるという実感を得ています。ぜひ多くの学校に導入いただき、多くの教員の皆さまにも経験していただきたいです。